

IATSS三十周年によせて

はじめの思い出—宮本常一氏の講話

藤井弥太郎 慶應義塾大学名誉教授

交通経済。慶應義塾大学経済学部を卒業したが病気で就職できず、(財)運輸調査局に潜り込んだことで今に至った。調査局の公募を知ったのも、たまたま鉄道研究会員で名前を知っていたから。人生は運というか縁というかの見本である。



入会させていただいて以来、さっぱり会のお手伝いはせずで、一方的に恩恵だけ受けてきた。もう20年以上も昔の話だが、記憶の最初は、宮本常一氏の話のうちがう会合があって、それに参加したことである。

宮本氏のことは高名な民俗学者としか知らず、不用意に出席したのだが、話の面白さに魅せられた。IATSSの会合だから交通に関するテーマで、江戸時代の旅の話であった。当方は歴史にうとく、封建時代には大名の参勤交代はともかく、庶民は土地に縛りつけられていたという程度の固定観念しかなかったが、宮本氏は、庶民もかなり自由に往来したと話された。確かに北斎・広重の絵や東海道中膝栗毛の話は見聞きしていたが、宮本氏の話は改めて強い印象を与えるものであった。

一つには、伊勢詣での名目で、人々は世間のしがらみをいつときは抜け出すことを許されていたことで、その範囲の広大さに驚いた。大勢の人が旅をして、国中に伊勢と同じ種類の杉の木立を見ることができるのは、参詣者たちが神宮の杉木立の種子を持ち帰ったからだということだった。乗物に依らずにひたすら足で歩くことでも、文化がそこまで広がるかと、人と旅の力に感じ入った。

もっともその後宮本氏は他界されたと聞き、「忘れられた日本人」や「土佐源氏」など膨大な著作集を拾い読んだり、佐野真一氏による評伝に感銘を受けたりしたから、実際にうかがったこととはどこかで混線しているかもしれないし、杉ではなかったかもしれず、そのあたりの記憶の間違ひはご寛容いただきたい。

また一つには、旅にかかる費用を調達するために、自発的に仲間で結衆人として、講が各地でつくられたことであった。だれもがいつか一度は公平に参詣の旅をできる機会を生み出す工夫として、庶民のたいした知恵でないか。

今のように流動性の高い世の中で宮本氏の研究や手法がどう評価されるのか、もちろん門外漢にはうかがい知る由もない。しかし、当方のようにいわゆる近代経済学の一端を学んでしまうと、自然法の概念に頼ることのない経済学の論理の透明性に魅せられる。かつて、清水幾太郎氏やロールズなどの倫理学や政治哲学の著作には経済学の概念や手法が多用されていたので、他の分野からも抗しがたい魅力があることがわかる。しかし、同時に、現実よりもモデルの論理の方が大事という傾きに嵌まっていることにふと気づくことも、しばしばある。最大多数の最大幸福と言うのは容易だが、最大多数と最大幸福をどのように整合させられるかは、経済政策の一端を学ぶ者にとって悪夢のような矛盾である。そんな折に、自発的な「共」の仕組みに研究の行く先の一つを教えられたように思えた。

IATSSなどの組織は学際的と言うことがもちろんできるだろうが、それぞれの研究分野が固有のパラダイムを持っているから、それらが容易に融合しうとも思えない。しかし、今になって、例えば公共性とはなんだろうかと考えて、ふと「公共圏」の概念に出会ったりすると、それは同じ交通の違った側面を宮本氏のような話から聞き知って、立ちどまってみることができる共の広場、ということらしいと気がつくのであった。